

図書館員の四季

心に残った

1件のReference Workから

大阪赤十字病院 泉谷 嗣郎

20年を振り返って

大阪府立成人病センター 足立 ひとみ

当院図書室では、平成4年度に入ってReference Work 開始以来14年の歳月を経過するに至りました。

この4月からのReference Workの中に、赤十字病院の「医療救護」に関して当院からも希望者による救護員派遣のため、その壮行会を行うに当たって、関連資料の提出依頼がありました。そこで、図書室では、『赤十字病院における海外派遣医療要員の状況』と題する資料を準備しました。

昨年赤十字医学会総会学術講演会のプログラムに国際救護のセッションが新設され、次の5題の演題が発表されました。演題は「湾岸戦争難民救護の派遣報告」、「ペシャワール病院での活動報告」、「紛争地への国際救護医療について」、「赤十字国際救護に参加して」、「チェルノブイリ原発事故救護事業に参加して」の5題です。ここでは、自然災害救護と戦争災害救護の相違点、負傷者・難民の救護医療では厳密な患者受け入れ基準の必要性が提唱されています。

当院でも日赤本社カンボジア医療協力事業の医療援助のため医師1名が派遣されることになり、6月8日に壮行会が行われ、6月12日に成田からカンボジアに出発しました。

このReference Workの結果が、受け取る側にとって十分な内容であったか、今になって、小生の力不足を反省しています。

図書館員でReference Workの担当をされている方々は、その業務の奥深さをよく経験し、又その困難さを感じておられることと思いますが、テーマの種類により、その取り扱いには充分で慎重な対策と、目的をしっかりと把握したうえで報告書を作成し提出することを改めて噛みしめ、この種の業務の今後の心積もりとして記憶して置きたいと思っています。(平成4年8月31日)

庶務課(タイプ業務)、調査部(図書業務)の兼務でセンターに配属されたのが図書室との初めての出会いで、それからもう20年が過ぎました。

当初は、私が不得意とする横文字が相手なので、不安がいっぱいで気の滅入ることもありましたが、元来身体を動かすことが好きな質なので、書架の間を行き来したり、人と人とのつながりを体験したり、タイプの仕事と半々にこなしているうちにあまり気にならなくなりました。

そのうち病図協に入会しましたが、研修会に参加して他の図書室の運営方法や工夫なども知り、多くを学ぶことができたいへん参考になりました。研修会の帰りにには自分の職場の事情と比較しながら、あの場合にはこんなにすれば良かったのかなどと思うこともたびたびでした。現在は病図協の医学雑誌総合目録編集委員として他の編集委員の方とともに頑張っています。

一方、職場においては時とともにワープロが普及し、タイプの仕事が減少してきました。最終的には本庁においてタイピストの職種が廃止され、事務職へ変わりました。その結果、日直業務が増え、また転勤といった話も出てきています。

このような状況の中でなかなか落ち着いた気持ちになれませんが、今まで毎日の業務の合間にしていた目録作成を大慌てでしたり、センター図書室のマニュアルづくりなどに精を出している今日この頃です。